DOI：10.20776/S03862097-51-P1

加藤隆先生を送る

大　森　雅　子

加藤隆先生は26年にわたって千葉大学に在職され、2022年３月末にご定年を迎えられます。比較文化論講座の教員を代表して、僭越ながらご挨拶を申し上げます。

神学及び聖書学の分野で多大な功績を残されていらっしゃる加藤先生のご研究については、私がここで改めて紹介する必要はないでしょう。千葉大学でのご研究・教育活動と並行して、礼拝堂やチャペルでの説教の他、朝日カルチャーセンターの市民講座等でも活躍されました。加藤先生の略歴と主要研究業績については、この拙文の後に掲載させていただきましたので、そちらをご覧いただきたく存じます。ここでは、「送る言葉」の執筆にあたって加藤先生から伺った貴重なお話の中から、略歴と業績には書かれていないけれども、加藤先生の研究活動のルーツと考えられそうな出来事を３つご紹介します。

加藤先生は東京大学教養学部に在学中に、駒場の「第17回銀杏並樹文学賞」（第一席なしの第二席）を受賞されたことがあるそうです。ペンネームは織賀進、作品のタイトルは「銀の星」という小説で、1978年の『学園』第51号（東京大学教養学部学友会）に掲載されました。以下、加藤先生のお言葉を引用します。

> 「銀杏並樹文学賞」作家なのだから、第二の大江健三郎、第二の庄司薫になる、と、誰も言ってくれないけれど、自分では思っていました。学生時代は「第19次新思潮」の同人として、小説家をめざした時期もありました。

このエピソードを伺ったとき、やはりそうだったのか、と即座に納得でき

ました。というのも、比較文化論講座の教員の間で不定期に開催された読書会で、日影丈吉、久生十蘭、横光利一の短編小説について自由に議論を交わす機会があったのですが、加藤先生の、古今東西の文学や芸術に関する幅広い見識と、味わい深く、時にユーモアを交えた語り口に私自身圧倒されていたからです。この読書会を通して、「元小説家志望青年」、今は「まだ小説家志望壮年」（御本人の言葉）としての加藤先生の一面を拝見できたことは望外の喜びでした。

また、加藤先生のご研究では、「西洋優位」「キリスト教優位」の考えから抜けられない西欧の神学研究者の偏狭な見方が批判され、聖書やヨーロッパ世界の意義が地球規模の観点から再考されていますが、こうした比較文化論的な研究の原点には、加藤先生の生い立ちが大きく関係しているように拝察します。先生のご出身は横浜ですが、お父様がいわゆる「引っ越し族」で、幼い頃から西宮、尼崎と転居が続いたそうです。中学３年生の２学期が終わった時点で東京に戻られましたが、転校先はなんと東宮御所の向いの青山の中学校だったとのこと。ご両親は東京出身で、家では標準語を使っていたこともあって、言葉については問題がなかったようですが、転居によって被ったカルチャーショックは相当なものであったのではないかと推察します。

> 青山では、家から学校まで、銀座線に乗って通学。革靴を履いて、学校がひけると、表参道駅まで友人と一緒に帰って、時には、「青学会館」のレストランでおやつ代わりの「カレーライス」を食べる。白いテーブルクロスのかかったテーブル、白いおしきせを着たボーイが給仕。「カレーライス」も、ご飯が皿に盛ってあって、それに、グレービーボートに入ったカレーが添えられる。日々の買い物は、表参道の紀伊国屋（今は地下になったけれど、当時は、地上二階建て）、あるいは、渋谷の東急東横店。紀伊国屋は、すこし高価だけど、それほど高いのではない。雰囲気が落ち着いている。清楚で、しかしワイルドな動きがどこかに秘められている。私が、幼い時から、ずっと薄暗がりのようなところ、ワイルドでなくメッシーなところに暮らしていて、ずっと光を求めていた

ということに、気づかされました。薄暗がりの世界がある。しかし、光がある世界もあって、そこでも、完璧ではありませんが、光が多い。

加藤先生の聖書学をめぐる比較文明論的な考察の原点は、「どこでも同じ、ではない」という事実を思い知らされた多感な思春期にあったと言えるかもしれません。

また、幼い時期の東京から関西への転校が、その後の人生に大きな影響を与えたことは確かなようです。1970年に大阪万博が開催された際に、中学生の加藤少年が何度か会場に行ったときのこと――

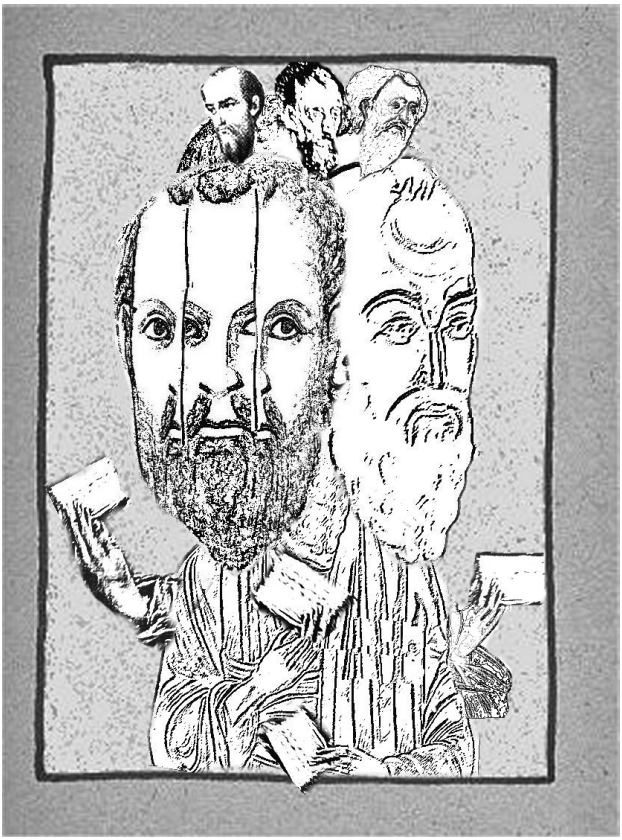
どの「パビリオン」も、長い行列ができていて、「人類の進歩と調和」でなく、「人類の辛抱と長蛇」と言われた。私が強烈に印象づけられたのは、ルノワールの「ピアノを弾く二人の少女」Renoir, Jeunes filles au pianoを見たこと。世界レベルの美術作品のオリジナルをきちんと見たのは、初めて。私の存在をかなり決定づけた。

ルノワールの絵画の威力はなんとも恐るべきものです。まるで運命に導かれるがごとく、成績優秀な加藤青年はフランスに惹きつけられていき、東京大学でフランス文学を修めた後には、チュニジアやアルジェリアでフランス語の通訳として実務経験も積み、やがてストラスブール大学で神学の博士号を取得することになったのですから。

以上、主観的ではありますが、加藤先生のご研究の出発点と関係がありそうなエピソードを紹介させていただきました。また、今回この原稿を執筆するにあたって、加藤先生に以前からずっとお尋ねしたいと思っていた、神学を研究することになったきっかけと、ヘブライ語と古代ギリシア語をどのように習得したかという点について、大変興味深いお話を伺うことができましたので、この拙文の直後に「加藤隆先生へのインタビュー」というコーナーを設けて、加藤先生のお言葉をそのまま掲載させていただきました。是非ご一読いただければ幸いです。

加藤先生は最近上梓された翻訳書のあとがき（『ちくま学芸文庫版への訳

者あとがき」、エチエンヌ・トロクメ『キリストの幼年期』、2021年）で、新約聖書学が現在閉塞状態にあると述べていらっしゃいます。しかし、西洋の伝統に深い理解をもちながらも、西洋にとらわれるだけではなく、非西洋の諸文明も理解できる立場にある非西洋出身の日本人こそが、聖書学において意義ある成果を発表できるとも書いていらっしゃいます。これまでそのような困難かつ重要なお仕事に真摯に取り組まれてきた加藤先生に深く敬意を表し、今後のご研究のさらなる発展を祈念しつつ、筆を置かせていただきます。



《パウロ》（加藤隆　筆）

加藤隆先生へのインタビュー

大森　加藤先生が神学を研究することになった理由を教えてください。

加藤先生　日本で学生だった時に、天使が来て、「神学をやれ」と命じるということがあったからです。新宿区のアパートにいた時期。雨が降っていた。私の部屋は、二階。誰かが、ガラスの窓を叩いている。（ここで、すでに超自然的な場面になってる）。私は、あわてず騒がず、「どなた？」と言う。「天使です」というか細い声。（この会話は日本語）。「天使なら、窓を開けなくても入れるのではないの？」（こうした対応ができるのは、『奥様は魔女』なんかを子供の時から見てるから）。「そんな理屈を言わないで、窓を開けてください」「はい、はい」椅子からしぶしぶ立って、窓をゆっくり開ける。（雨なので、窓には水滴がいっぱいで、外の様子は分からない）。この「しぶしぶ」の感じは、樹木希林さんの雰囲気で。「天使」は、ひとりでなく、三人。（天使は、日本語で「～人」と数えるのでしょうか？）しかも、みんな、若くて可愛い日本人の女の子の姿で、私が理想として思っていた姿にぴったり。背中に大きな翼がある。窓から入ろうとすると、その羽根がつかえて、それを押し込むようにして助けてあげないと、入れない。「よいしょ」といったことを言いながら、三人とも入室。それで、彼女たちは、少し威儀をただして、「恐れるな」と言う。私「別に恐れていませんけど」と、言う。天使のリーダー格、「あなた、やりにくいね」。「まあまあ。よく来てくれました。座布団は一つしかないけど、よかったらどうぞ」。彼女たちと私は、畳の上に正座してる。「私たちは、天使です」「そうですか。でも〈天使です〉と言われても、すぐにそうだと思う訳にはいかない。見た目も、いかにも〈天使です〉という感じですが。天使と言えば、善玉ですね。その反対は、〈悪魔〉〈サタン〉ですが。サタンが現れたとして、〈サタンです〉と言うサタンは、いないでしょ」「……」「〈税務署の方から来た〉と言う者がいても、それが本当の税務署の役人とは限らない、のと同様です」「……」「あなた方が、〈天

使〉だということを、私に納得させてください」「……」

天使たちは、やっと、「神学をやれ」と命じる。私は、またまたいろいろまぜっかえそうとするのですが、彼女たちは、すくっと立って、窓や壁をす〜と通り抜けて、外に出てしまう。私はあわてて、窓を開けて、外を見る。彼女たちは、日本伝統の「土鍋」、あるいは「吉野家の丼（蓋つき）」という形の、飛行装置みたいなものに乗り込んで、去ってしまう。

これが「天使の命令」ヴァージョンです。

もう少し真面目なヴァージョンだと、周りに、「神学的現実」を感じている者がいなくて、不満に思っていた、ということがあります。短く言うなら、古代ギリシアで、下品で無秩序な、どんちゃん騒ぎの酒盛りしか思いつかない者たちばかりである。ディオニュソスの神しか知らない者ばかり。オルフェウスが来ていて、竪琴を鳴らしているのに、そうした音楽が奏でられていることさえも気づいていない者ばかり。日本でフランス文学を学んでいた時の、だいたいの雰囲気が、そうでした。「記号論」とか「テキストの構造」といった無機質なことについてしか、議論できていない。フランスから日本に帰国した後も、ある時、日本人のフランス文学研究者に、私がフランスで神学を勉強したと言うと、唯一の反応が、「ジョルジュ・バタイユの『神学大全』をどう思うか」でした。

長くなるので、このあたりにします。自叙伝のようなものを書く機会があれば、このあたりのこともしっかり書きます。

大森　加藤先生はストラスブール大学プロテスタント神学部に入学後、ヘブライ語と古代ギリシア語を習得されましたが、習得は大変でしたか？　どのように勉強されましたか？

加藤先生　私は、日本の大学では、フランス文学を勉強しました。それから、フランスのストラスブール大学で、神学を勉強しました。日本の大学での単位がありましたが、「聖書の言語であるヘブライ語と古代ギリシア語を習得していない」ということで、学部の一年生に入学しました。

フランスの大学は、秋に、学年が始まります。神学部では、正規の授業が

始まる前に、２週間の「古代ギリシア語の集中入門講義Sessions intensives du grec ancien」があり、これは必須の授業です。２週間で古代ギリシア語の文法をひとわたり学習して、新約聖書の原文が読めるようになる、ということを目的にした授業です。

W. Wenham, Initiation au grec du Nouveau Testamentという本が教科書でした。これは、J.W. Wenham, The Elements of New Testament Greek, Cambridge University Pressという英語の本を、フランス語版に改めたものです。フランス語版は、手動のタイプで打ったテキストを印刷して綴じたという体裁のものでした。全部で44課。

一週間の授業は、月曜から金曜の五日間。午前は、先生が講義。午後は、練習問題を皆でやる、という形式でした。

後から気づいたことですが、古代ギリシア語のこの習得授業には、大きな欠陥がある。二点あります。

採用されている教科書が「新約聖書ギリシア語」についてのものになっている。新約聖書は、一冊の中規模くらいの文庫本ができるくらいの量です。キリスト教の神学を学ぶ上で、新約聖書が重要なのは分かります。しかし、一つの言語（古代ギリシア語）を学ぶのに、一冊の本にあるテキストだけを考慮するというのは、不適切なアプローチです。文法は、だいたいのところ、全般が学べます。しかし、語彙などが、きわめて限定されて、偏っている。日本語を学ぶのに、たとえば「夏目漱石の〈猫〉の日本語」という入門の教科書で、日本語を習得できるでしょうか。その学生は、たとえば「吾輩は、フランス人である。名は、ピエールである」なんて、言いだしてしまいます。したがって、このギリシア語教科書で学んでも、古代ギリシア語の他の文献を読むのはきわめて困難です。聖書関連では、たとえば「七十人訳聖書」が重要ですが、語彙など、まったく不足です。

もう一つの欠陥は、この教科書では、古代ギリシア語の「アクセント類」が、完全に無視されている、ということ。「アクセント類を知らなくても、初心者は、テキストがなんとか読めるから」というような理由が記されていました。しかし、古代ギリシア語の知識がある程度進むと、アクセント類についての理解は不可欠です。アクセント類についての理解が必要だと気づ

く、そして、アクセント類を改めて自分で学ぶ、これには余計な時間と手間がかかってしまいました。

２週間の「集中入門講義」が終わると、試験があります。これに合格しないと、先に進めません。受講者の半分くらいは落第になります。

フランスの大学では、１年生は、二年間で取得できるDEUG（Diplôme d'études universitaires générales大学一般課程修了免状）という免状の取得を目指すことになります。これは、日本の大学の制度に沿って言うなら、最初の２年間の教養課程修了を認定する免状です。

「古代ギリシア語の集中入門講義」は、必修ですから、これに合格しないとDEUGを取得できません。試験に落第した人は、次の年度に再挑戦することになります。彼らは、redoublantsと言われます。ただし、DEUGは、二年間で取得するもので、特別に認めてもらって、３年目で必要単位を揃えるということもあり得ますが、３年目が最長の期間です。ここでDEUGを取得できないと、あとは、一生、DEUGに挑戦できなくなります。つまり、大学卒業資格が取れなくなります。

ヘブライ語の授業は、秋からの通常の授業期間に始まります。用いられた入門用教科書は、Paul Auvray, Initiation à l'Hébreu Biblique, Desclée という1955年に出た本です。この教科書は、いろいろと工夫されているのでしょうが、取りつきにくい構成になっていると思いました。古代ギリシア語は、たくさんの活用などがあって、欧米では、習得が難しい言語という評判になっています。学生が、小高い丘の木陰で、古代ギリシア語入門の教科書を手にして勉強していた。そこに熊が現われて、学生に襲い掛かろうとした。そこで、学生が、手にした教科書を掲げて「It's Greek」（ここは、なぜか英語でいうのが慣例）と叫ぶと、熊が恐れをなして逃げていった、というジョークがあるくらいです。

ヘブライ語は、文字に親しみがなく、最初は違和感がありますが、古代ギリシア語文法ほど複雑ではない。ある程度のところの文法をやったら、もう旧約聖書本文を読みだしていました。

神学部での授業には、他の課目もたくさんあります。二つの言語の習得は、初級文法を終えたというところで停滞して、結局は、知識がおろそかに

なり、忘れられてしまいます。試験になんとか合格する人も、これらの言語が身につかないままで終わってしまう場合がほとんどです。実践的な方向に勉強を進める人は、後で牧師になるコースを選ぶのですが、実地で牧師として活動している人も、ギリシア語・ヘブライ語を忘れてしまっている場合がほとんどです。重要な単語などについては、いかにも「分かってる」という雰囲気の議論をしたりしますが、それ以上の議論はできない。

哲学をやっているのに、ギリシア語が全然できない、というのと同じです。

それどころか、こんなことがありました。フランスで「仏教が専門」というフランス人の教授の先生に会ったことがあります。言語の話になったのですが、その人は、サンスクリット語もパーリ語もできない。中国語や朝鮮語、日本語その他の、仏教関連の文献の理解に必要な言語が何もできない。

どこかの国で、フランス文学を大学で教えているのですが、初級文法を教えられる程度以上のフランス語ができないという教授にも会ったことがあります。「人文主義、ユマニスム」の伝統はどこに行ってしまったのでしょうか。

それから、もう一点。

私は、フランスの神学部に一年生から入学して、博士号取得まで勉強しました。フランスの大学での神学の分野の制度がどうなっているか、具体的に体験してきましたが、日本に帰ってきても、こうした経験・知識がまったく役立っていない、興味を示す人や機関がまったく存在しない、という状態になっていて、残念に思っています。

加藤隆先生　略歴

1957年２月、横浜に生まれる。これに先立つ１月、ハンフリー・ボガート Humphrey Bogartが亡くなる。「私は自分からもっと多くのことを獲得できると思っていたが、すべてが実現できたのではなかった」。

東京都港区立青山中学校卒。東京都立日比谷高等学校卒。東京大学文学部仏文科卒。

卒論はプルースト、指導教官は、菅野昭正先生。

1983年ストラスブール大学プロテスタント神学部入学。フランス政府給費留学生。

（聖書の言語であるヘブライ語と古代ギリシア語を習得していないということで、DEUGの一年生（学部の一年生）に入学）。

修士論文、博士論文の指導教官は、エチエンヌ・トロクメ。

修士論文は『ヘブライ人への手紙における大祭司としてのキリストの概念と役割』。

1993年ストラスブール大学プロテスタント神学部博士課程修了。 神学博士。

博士論文は『ルカ文書における社会思想』。

1995年４月より　千葉大学文学部国際言語文化学科比較文化講座および大学院文学研究科助教授

1997年中村元賞受賞（下記 La pensée sociale de Luc-Actes, 1997により）。

2004年５月より　千葉大学文学部国際言語文化学科比較文化講座、大学院文学研究科および社会文化科学研究科教授

【著書・論文】

La pensée sociale de Luc-Actes, (coll. Etudes d'Histoire et de Philosophie Religieuses, No. 76), Presses Universitaires de France, Paris, 1997

『『新約聖書』の誕生』講談社選書メチエ　1999年

『新約聖書はなぜギリシア語で書かれたか』大修館書店　1999年

『一神教の誕生　ユダヤ教からキリスト教へ』講談社現代新書　2002年

『福音書＝四つの物語』講談社選書メチエ　2004年

『『新約聖書』の「たとえ」を解く』ちくま新書　2006年
『旧約聖書の誕生』筑摩書房　2008年　のちちくま学芸文庫
『「新約聖書」とその時代』日本放送出版協会（NHKシリーズ）2010年
『歴史の中の『新約聖書』』ちくま新書、2010年
『武器としての社会類型論　世界を五つのタイプで見る』講談社現代新書　2012年
『旧約聖書』（100分de名著、NHKテレビテキスト）、NHK出版、2014年
『集中講義　旧約聖書』（別冊NHK100分de名著）、NHK出版、2016年
〔論文〕「ユダヤ教・キリスト教の伝統から見た現代西欧社会の課題」2020. 2. 1（平和政策研究所、政策オピニオン）p. 1–14（Web上公開）（『世界平和研究』226、2020夏、p. 53–67、再録）
〔論文〕「人類の文明世界構築と中国文明」2020. 7. 20（平和政策研究所、政策オピニオン）p. 1–9（Web上公開）
その他多数

【翻訳】

E. トロクメ『受難物語の起源』教文館（聖書の研究シリーズ）1998年
エチエンヌ・トロクメ『キリスト教の揺籃期　その誕生と成立』新教出版社　1998年
エチエンヌ・トロクメ『四つの福音書、ただ一つの信仰』新教出版社　2002年
マルク・フィロネンコ『主の祈り　イエスの祈りから弟子たちの祈りへ』新教出版社　2003年
エチエンヌ・トロクメ『聖パウロ』白水社　文庫クセジュ　2004年
レジス・ビュルネ『新約聖書入門』白水社　文庫クセジュ　2005年
イヴ・ブリュレ『カトリシスムとは何か　キリスト教の歴史をとおして』白水社　文庫クセジュ　2007年
エチエンヌ・トロクメ『キリスト教の幼年期』ちくま学芸文庫　2021年（『キリスト教の揺籃期』1998年の改定版）
その他多数